

頼朝拳兵の位相

—反平家の系譜から—

今 井 正 之 助

序・I 序章のはたらき

『平家物語』を平家滅亡の物語ととらえるとき、「是ぞ平家の悪行の始なる」(殿下乗合)から「悪行数を尽して所残は只都遷計也」(都遷)へと繋がる、平家(清盛)の悪行の累積が一族あげての滅亡という終末をもたらした、とその骨格を押さえることができよう。悪行の累積による一門滅亡という構成を端的に表明するのが、灌頂巻「女院死去」の一節である。

是はたゞ入道相国、一天四海を掌ににぎ^②て、上は一人をもおそれず、下は万民をも顧ず、死罪流刑、おもふさまに行い、世をも人をも憚^①かられざりしがいたす所なり。

父祖の罪業は子孫にむくふといふ事疑なしとぞ見えたりける。しかし、これが覚一本ではじめて記された文言であることに象徴されるように、こうした因果観的構想は覚一本階段で完成をみたものであり、作品形成の当初から作品の細部までを律していたものとはいいがたいこと、また、この因果観的構想を担

う論理が単なる儒仏の思想に還元できぬ、多元的なものであることは佐伯真一氏の説くところである。⁽¹⁾しかも、その因果観的構想にしたところで、覚一本を用いて立論した兵藤裕己氏に

王朝的秩序を崩壊へ導くのは、平家一門の「悪行」などでは説明しきれない。それは平家一門の「おごり」「悪行」によって加速されたにしても、まず「末世」ゆえの王朝的秩序の崩壊という事実があり、それがむしろ平家一門の過分の栄花・「おごり」を可能にしたという関係である。そして注意したいことは、「末世」「洩季」という終末的状态が物語の前提としてある以上、序章に仕組まれた王権因果論、およびそこからする因果論的構想も基本的にはなり立たないということである。

この指摘がある。⁽²⁾因果観(論)的構想が「物語における相対的な原理ではない」(兵藤氏)ことは、「運命」という観念との絡みからも浮かんでくる。「人の運命の傾かんとては、必悪事を思ひ立候也」(覚一本巻二「教訓状」)といったありよう

は、末世と悪行との場合と類同の關係を示しているだろう。

ちなみに、「末世」「世の末」等の語が卷一、二を中心に卷六までの前半に集中するのに対し、「運」「運命」等の語は卷七以降に増加する。⁽³⁾世が末世の濁乱に覆いつくされていく中で、源氏・平家の負った運の興廢が対照的に語られるという図式であるが、

何事も限りある事で候へば、平家たのしみさかへて廿余年、され共悪行法に過て、既に亡び候なんず。(卷三。岩波大系 263頁)

あるいは、これは延慶本に見られる表現であるが

○花一時人一時ト申譬アリ。平家ハ世末ニナリタリトミユ。
(第二末 39オ)

○廿一年過ヌレバ瀕ハ瀕トナリ、瀕ハ瀕ニナル。平家既ニ廿余年ノ間天下ヲ治ム。今ハ世ノ末ニ成テ、悪行日ヲ経テ倍増ス。滅亡ノ期来歟ト見タリ。其後ハ又源氏之繁昌疑ナシ。

(第二末 55ウ)

という言いまわしを介在されてみると、運・運命は「人間の力のおよび得ないもの、予見しがたい力、歴史と人間を背後にあって動かしている漠然とした力」⁽⁴⁾というよりも、歴史と人間がいわばその流れに浸されている、自然の順行的な色あいを看過しがたい。その意味で、末世・末世観とも一脈通ずるものがある⁽⁵⁾。

こうした理念の重層的・複合的なあり方は、いうまでもなく

「諸行無常」「盛者必衰」⁽⁶⁾の大前提の上に、驕り・猛悪故の滅亡という因果を説く序章のさし示すところである。平家の滅亡は悪行の報いであると同時に、栄花ゆえの滅亡であり、運尽き時節到来しての滅亡であり、さらに、そうした悪行・異常な栄花をもたらした増幅する、末世・晩季の時の流れの赴くところでもあった。序章については、佐伯真一氏に「本来、物語世界がどのように進行するかという、筋立てに関わるものではなく、平氏滅亡という結果に焦点を絞った理法の宣言としての性格を有していた」⁽⁷⁾との指摘があるが、まさに序章の本領はその思想の如何よりも、論理の複合性ゆえの自在さによって、物語の多様な展開を許しつつそれを最終的にからめとってしまうところにある。平家物語が異本の世界をも含め、平家の滅亡には直結しないかにみえる多彩な記事を取り込みながら、全体としての或まとまりを感じさせるのも、物語の冒頭に鎮座する、こうした序章のはたらしに負うところが大きいであらう。

序・2 反平家の系譜

平家は自らの悪行の嵩により一挙に奔流と化した、時の流れの中に滅んだ。しかし、平家物語は序章の粘着力と編年体構成によってのみ叙事の統合をはかっているわけではない。平家の滅亡が自滅といってよい側面を多分にもつとしても、現実になれを減ばした勢力があったわけで、物語の長編性を支える内的論理の存在は反平家運動の叙述からも探られる必要がある。

これまで、鹿谷事件、高倉宮謀叛、頼朝拳兵という、個々の事件の検討はそれぞれに進められてきたものの、平家討滅の企ての系譜を明確に対象化しての物語の読み取りは意外に少なかったように思う。その意味で、今成元昭氏の

『平家物語』は、反平家運動が次第に力を得て遂に平家を亡ぼすに至る過程を、鹿谷事件、以仁王事件、頼朝拳兵という三つの大きな事件によって典型的に示している。その典型化は見事なもので、階層的には第一事件が貴族、第二が貴族と武士、第三が武士を核として試みられたこと、それに伴って、事件の経緯は、第一が爾前につぶされ、第二が緒戦で敗れ、第三において成功することになった、という構成となっているのである。したがって、第二の事件の張本が〈文武〉に達した人であったという話は、第一事件の鹿谷山荘ではかない言葉遊びや猿楽に見られた〈文〉から、第三事件を推進した〈武〉への過渡的な意味あいをもって、歴史推移の真実に対する一つの文芸的なアプローチを試みることになっているのである。

という指摘は簡単ではあるが、要を得た素描であった。また、麻原美子氏の

○頼朝と文覚の役どころは全く以仁王と頼政の役廻りと同じなのである。

○謀叛計画を起こすに十分な理由のある人物が主謀者の位置にはなく、全く理由のない個人的かわりにおいて協力

者であったに過ぎない人物が、教唆煽動者としてまったりあげられ、主謀者の位置に立っているということである。

という分析、及び早川厚一氏の⁽¹⁰⁾

以仁王事件は、歴史上においては、頼朝拳兵の前段階的側面を持ったものであったが、物語においてはどうかであろうか。すなわち、後白河院の院宣に対応するのが、以仁王の令旨であり、頼朝に対比されるのが、頼政である。(中略)

また、文覚は惟長に対比しうるかもしれない。すなわち、以仁王事件は、その人にあらぬ者によって画策され実行された拳兵であったため、失敗に帰したと記そうとするのであろうか。全体を見渡した検討が今後必要とされよう。

この発言は、反平家運動の物語上の定位をより精緻になそうとしていて貴重である。

本稿は、これら先学の成果に導かれつつ、反平家の動きが頼朝の拳兵に結実していく様相を明かし、これが平家滅亡の時の流れに塗り重ねられることによって、物語の叙事が成り立っていることの確認をめざす。

また、以下の考察にあたっては四部合戦状本(四部本と略称する)⁽¹¹⁾を中心にすえる。本稿は特定の異本の特質をとらえようとするものではないが、「四部合戦状本にも(中略)靈驗譚・奇瑞譚が他の諸本と同様に多く登場するが、その扱い方は、本来の説話の物語における意味や論理構造から遠のかせて行くという方向性が感じられる」という評価もあることから、あえて

四部本による立論を試み、以下の論点が基本的に平家物語諸本全体に亘るものであることを示そうと思う。

一 成親、高倉宮、そして頼朝

平家の隆盛は同時に反平家の思いをも生み出し、それは鹿谷事件として最初の癡結をみた。鹿谷事件は、しかし、非分の大将叙任にあくまで固執する新大納言成親の野心のなせるわざとして、事の始めから

何の不足有ってか斯かる心付きにけむ。是亦天魔の致す所なり。(巻一 36 左)

と断じられた。これに対し、高倉宮、頼朝は自身の帝位へのものぞみ、平治の雪辱を期す多年の宿願もさることながら、⁽¹³⁾ 第三者たる頼政の

平家を亡ぼし、法皇の何と無く打ち籠められて御在すをも^{やす}息め奉らせたまひなば、御至孝にてこそ候はめ(巻四 8 才)

同じく文覚の

平家の世は末に成て見ゆ。嫡子小松内大臣こそ吉人にて計いも賢く、心も豪に御しつるに失せたまひぬ。前右大將宗盛は世を取りたまひけれども若亡の者にて、天下の政務には及ばず。(巻五 181 右)

という説得が介在することにより、その行為は個人的願望の域を脱し、さらに、宮に対しては伊長による「御位の相御在す」との観相が、頼朝には文覚の「御辺には高運の相御在す」との

見立てが共に語られ、事の成就が予祝されてもいる。

ただし、高倉宮と頼朝とは決定的な相違があった。高倉宮謀叛の顛末を記したあと、物語は頼政が宮に謀叛を促したのは、実のところ嫡子仲綱の所有していた木下という馬を宗盛が所望したことに端を発する遺恨であったと明かし、

是又只事に非ず。怨靈の致す処と思ふこそ怖しけれ。(巻

四 37 才)

と結ぶ。⁽¹⁴⁾ 他方、「文覚が平家討伐を企てるに至った経緯は明らかでない」との指摘があるように、⁽¹⁵⁾ 文覚には頼朝に平家討滅を教唆する私的な理由は与えられていない。⁽¹⁶⁾

頼朝挙兵の知らせが京にもたらされる前に、物語は源雅頼の青侍が見た夢の話を書し留める。いわゆる「青侍夢」であるが、大内裏神祇官にて神々が征夷大將軍の象徴たる剣を清盛から取上げ、伊豆の流人頼朝に(さらにその後は藤氏に)与えることを議定する。文覚が平家討滅の個人的理由を持たないのは、物語において、この議定の場から頼朝のもとに遣わされた使者として存在するからであらう。⁽¹⁷⁾

耆老の輩の前後を弁するは「いさとよ、頼朝が分限にて争か程の大事を思立つべき。是は日来の悪事積りて神明三寶や彼の心に入替たまひけむ。(後略)」と内々ささやきあへり。(巻五 163 右)

これは大庭景親による頼朝挙兵の報を受けた平家側の反応の一部で、四部本のみにみられる記述であるが、頼朝の挙兵が

「神明三宝」の冥意を受けてのものだとするのは、四部本のみの解釈ではなからう。

高倉宮謀叛と頼朝拳兵は相似の構造をもつ。

しかし、それは対称的な、いふなれば正負逆転してのものであった。はなから否定的な扱いの鹿谷事件、陣容は整っているかに見え、根幹に負の要因を内包する高倉宮謀叛を経て、伊豆の流人でありながら、神々の冥意を帯びての頼朝拳兵が続く。こうした叙述構造はもちろん、多田藏人行綱の返忠により事前に一網打尽の憂目を見た〈鹿谷事件〉、山門の自陣への引入れ、六波羅夜討等、計画が事々に中途で挫折し、宇治に敗亡した〈高倉宮謀叛〉、石橋山で敗北を喫しながらも勢力を回復・増強し、勝利を収めた〈頼朝拳兵〉という、各事件の結果から仕組まれたものに相違ない。しかし、このように仕組むことにより、物語は頼朝こそが平家に対する真の対抗者であり、勝利者であることをうちだしているのであって、各事件の編年的叙述がそのまま直ちにいまみるような物語の姿を形作るわけではない。

二 頼朝と義仲

頼朝拳兵の位置は、続く木曾義仲拳兵の描きようからも窺えよう。頼朝が文覚の説得をもってはじめて（心中はいざ知らず）拳兵の意志を口外し、現実の行動をおこしたのとは異なり、義仲は

成人の後、平家を引き試みんが為に、忍て度々京へ上りた

りけれども、平家の運盛なりければ子細に及ばず。（巻五 208 右）

と自らの意志で行動にはしっている。⁽¹⁹⁾のみならず、頼朝拳兵における「青侍夢」のような記事、あるいは「御辺には高運の相御在す」という類の予言、こうしたいわば義仲神話化の要素に乏しい。義仲は

又、信濃国安東の郡に木曾と云所に、故六条判官為義の孫、帯刀先生義賢が次男に、木曾冠者義仲と云ふ者有り。（巻五 206 左）

と物語世界に登場するにすぎない。ただし、覚一本には

(A)「ありがたきつよ弓、勢兵、馬の上、かちだち、すべて上古の田村・利仁・余五將軍、致頼・保昌・先祖頼光、義家朝臣といふとも、争かそにはまさるべき」とぞ人申ける。

（岩波大系巻六402頁）

(B)兼遠にぐせられて、つねは都へのぼり、平家の人々の振舞、ありさまをも見うかゞひけり。十三で元服しけるも、八幡へまいり八幡大菩薩の御まへにて、「わが四代の祖父義家朝臣は、此御神の御子となして、名をば八幡太郎と号しき。かつ²⁰は其跡をうべし」とて、八幡大菩薩の御宝前にてもとどりとりあげ、木曾次郎義仲とこそつゝめたりけれ。（同403頁）

と義仲礼賛、英雄化の傾向があるが、いずれも覚一本以後の加筆と思われる。ことに、後者は(A)(B)の間をつなぐ次の一節

或時めのとの兼遠をめししての給ひけるは、「兵衛佐頼朝既に謀叛をおこし、東八ヶ国をうちしたがへて、東海道よりのぼり、平家をおひおとさんとすなり。義仲も東山・北陸兩道をしたがへて、今一日も先に平家をせめおとし、たとへば、日本国ふたりの將軍といはればや」とほのめかしければ、中三兼遠大にかしこまり悦で、「其にこそ君をば今まで養育し奉れ。かう仰らるゝこそ、誠に八幡殿の御末ともおぼえさせ結へ」とて、やがて謀叛をくはだてけり。

との接続が不審である。義仲は頼朝拳兵を耳にし、拳兵の意志をうちあけているが、当時すでに二十七歳²⁰、続(B)では兼遠とともに平家を探り、十三歳で元服したとあり、『平家物語全注釈』(中巻200頁)のように「(もっともこれまでに)」とでも言葉を補わない限り、了解できない。が、文脈上の問題はおくとしても、早くからの意志表明がありながら、覚一本においても実際の拳兵は頼朝拳兵を聞き及んで後のことであつたし、義仲の願望とするところも「日本国ふたりの將軍」として、頼朝に並び立つことに留まる。義仲は所詮、頼朝を越えることはできない。物語は義仲の登場のはじめから、そのことをはっきり確認しているといえよう。

三 反平家の系譜と説話群

反平家の動きは頼朝拳兵に収斂していく。その物語の展開を前述の叙述構造と相俟って具現しているのが、成親、高倉宮、

頼朝にまつわる説話群である。

成親

妙音院師長の大将辞任に伴う後任に徳大寺実定らの名がある中、新大納言成親は後白河院の寵愛をたのみに大将の地位に執念を燃やし、「様々の祈り」を始めた。しかし、そのいずれも悉く不調を示すものでしかなかった。

○八幡宮に有る僧を籠めて、真説の大般若を読ませたまひけるに、半袂計りに及んで香良大明神の御前なる橘の木に、鶺鴒が兩つ食ひ合ひて死ににけり。(中略)

○又、賀茂の上の社に有る僧を籠めて外法を行はれける程に、宝殿の後の二つの榎の木に雷落ち懸りて、火燃え付きて若宮の社焼けにけり。(中略)

○加様の恠にも恐れず、成親卿尚ほ賀茂の社へ百日の日詣でをぞ為られける。百日に満ずる夜(中略)大明神の御託宣にや、

桜花賀茂の河風恨むなよ散るをばえこそ留めざりけれ

(以上、巻一33左―34左)

高倉宮

この、事の始めから徹底して、成就の望みなきことを語る成親説話と異なり、高倉宮の場合は些か微妙な様相を示す。高倉宮は非凡な資質をもった人物であつた。

御手跡^{いづく}厳しく、御才覚も優に御在しければ、「位にも即かせたまふならば、末代の賢王とも謂ひつべし」

と世評も高かった。頼政の「太子にも立ちたまひ、帝位にも即かせたまふべきに」との勸説も、

少納言伊長と申す人は、阿古丸の大納言宗通卿の孫子、備前々司季通が子、拙き相人にて御在しければ、時の人相少納言とぞ申しける。然るべき事にこそと思し食し立たせたまひつつ、令旨を諸国に下されけり。(巻四8ウ)

この伊長親相説話も、決して実質の伴わない、空虚なものではなかったはずである。

また、宮の謀叛計画が露頭し、女装して御所を脱出する途次に

景行天王第二の王子小雄王子日本武尊是也こそ、昔異国を平らげに渡りたまひたりけるに、乙女の体を為て、賊主河上建をば殺せしとなん。(巻四11オ)

と故事説話を引き、さらに三井寺をめざし、東山山中に行きなやむ宮の姿に

昔、天武天王、大友王子に襲はれ、吉野山へ入らせたまひけるも、是くや思し食されけん(21)と推量られて哀れなり。

(12オ)

と天武帝の逃避行が重ね合わせられる。前者の、日本武尊になぞらえることには問題がないでもないが、ここは河上建誅伐をはたす過程の労苦として、好ましき先例としてあることは疑いない。天武帝の故事は、再度、所を変えて引用される。山門の協力が得られず、三井寺の謀叛軍は六波羅夜討に活路を開こう

とするが、平家に内通する者のために僉議が長びく。これを制し、衆議を一一に決したのが老僧慶秀の叱咤であった。

証拠を外に尋ねべからず。我等の本願清見原天王、大友王子に襲はれ、吉野の宮を出てつつ大和国宇多郡を通らせ御在ししには、上下七騎なりけれども、伊賀・伊勢・尾張三箇国を催し、終に軍に勝ちたまふ。復た窮鳥懐に入る。人倫之を助くと云ふ。僉議端多し。五月の短夜明けなんとす。人をば知るべからず、慶秀が同宿、早々六波羅へ打ち入り、平家の首を取りて進らせたまへ。(19オ)

この説話引用は地の文ではないが、右に述べたように事件展開の要所でのものであり、その比重は軽くない。⁽²²⁾しかし、天武帝の吉例も空しく、夜討はすでに機を逸していた。次に引くのは高倉宮自身に関わる例証ではないがやはり同種の問題を孕んでいる。

時刻押し移りて、鶏既に鳴きければ、仲綱申しけるは「夜既に明けなんとす。無勢にては何かが有るべき」と云ふ所に、円満院の大輔申しけるは「昔、孟嘗君、敵に襲はれ、函谷関を通らんとするに、『鶏鳴かずしては関の戸を開くべからず、敵は後に迫め近付く、何かが為べき』と云ふ処に、三千人の客の中に鶏鳴と云ふ郎等、鶏の鳴くまね学を為けり。上手にて少しも違はざりければ、関路の鶏、之を聞き皆鳴きぬ。関守之を開き、関の戸を開く。さて通りけりと伝へ承る。而れば是は敵の計りことにて侍るやらん、只寄

せよ」と申しけれども、夜も明けければ引き退く。(20才)
六波羅攻撃の大手を率る仲綱と配下の僧円満院大輔とのやりとりである。難関を前にしての同種の場面に巻九「宇治川先陣」における義経軍の渡河があげられる。

こゝに大將軍九郎御曹司、河のはたにすゝみ出、水のおもてをみわたして、人々の心をみるとやおもはれけん、「いかゞせん、淀・いもあらあへやまはるべき、水のおち足をやまつべき」との給へば、畠山、其比はいまだ生年廿一になりけるが、すゝみいでて申けるは、「鎌倉にてよくよく此河の御沙汰は候しぞかし。しろしめさぬ海河の、俄にできても候はばこそ。此河は近江の水海の末なれば、まつともく水ひまじ。橋をば又誰かわたいてまいらすべき。治承の合戦に、足利又太郎忠綱は、鬼神でわたしけるか、重忠瀬ぶみ仕らん」とて、丹の党をむねとして、五百余騎ひし／＼とくつばみをならぶところに(覚一本巻九169頁)⁽²³⁾

義経はあえて悠長な作戦を口にするにより、配下の勇猛な反応をひき出し、全軍の渡河を実現しおおすのであり、指揮官の意向・配下の応答・例証が三位一体となって緊迫した場面が築かれている。これに比し、問題の六波羅夜討軍の場合、仲綱の意向(明示されていないが、「無勢にては何かが有るべき」は文字通りのためらいであつただろう。木下馬の話から窺える仲綱の器量と通底するものがあると言つては言いすぎか)、円満院大輔の応答、現実には夜が明けてしまい、例証としての意味

を持たない引例と、ちぐはぐなことこの上ない状態を呈する。
このように高倉宮をめぐる説話はいずれも事の成就を予祝するかにみえて、期待を裏切っていく。高倉宮謀叛は齟齬、期待はずれの印象に色濃く縁取られる。その肩すかしの最たるものは、宮勸説の頼政の熱弁が、馬をめぐる私怨に根ざしていたことであつた。

成親個人の野心に始発し、平家打倒の謀議も所詮机上のものではしかなかった鹿谷事件と異なり、高倉宮謀叛は世評高き宮を奉戴し、相応の準備をととのえたものであつた。しかし、それも目論み違いが相次ぎ、武力戦としては結局、緒戦での敗退におわつた。叙上の高倉宮事件を縁取る説話群は、こうした事件の顛末を表象するものだといえよう。

頼朝

平家討滅の企図は成親、高倉宮と階梯を経るようにして頼朝に至り、真の担い手を見出す。そのことを以下の日胤の説話は象徴的に示す。

さる程に敵追ひ付き奉り、落ち合はんとしけれども、寺法師に律・静房・日胤法師・刑部房俊秀・荒伊賀、此等追ひ付き進らせ、命を捨てて剣を揮ひ、隙無く散々に戦ふ。律・静房、飛騨判官と組み、大勢の中へ懸け入り討ち死にしけり。伊賀房は落ちにけり。「日胤法師、兵衛佐の許より、祈れと有りければ、八幡の宮に千日参籠して无言の大般若を説誦しけるが、六百日に当る夜、金の甲を御宝殿より賜るとぞ

御示現有りける。折節、寺に事有りと聞き、喜び罷りければ、指せる事も无かりける。宿願満てんとて八幡へ落ちにけり。凡そは怖しき者なり」(巻四28才)

右は高倉宮最後の場面であり、延慶本は「」内に相当する記事を後日譚として後述する。この部分、四部本は律静房と日胤法師を別人扱いするなど、いくつかの疑点があるが、近く早川厚一氏が問題提起するように、単純な錯誤とはいえないようだ。まず、傍線部の表現は、齟齬・期待はずれという要素において、高倉宮をとりまく説話群と軌を一にすることに注意したい。そして、その満たされない思いはこの後、兵衛佐頼朝によって遂げられていくのであるから、本話はまさに高倉宮謀叛と頼朝拳兵との接点にあって、両者を架橋するものと評してよいであろう。ちなみに、傍線部以下を延慶本は

御宝殿ヨリ金ノ甲ヲ給テ、兵衛佐ニ奉レト示現ヲ蒙テ、伊豆国へ使者ヲ下テ此由ヲ甲ケル。折節寺ニ騒動有ト聞エケレハ、寺ニ下テ此事ニ組シテ討死シケリ。兵衛佐聞給テイカニ哀レト思給ケム。サレハ律静房ノ為ニトテ、伊賀国山田郷ト云所ヲ蘭城寺ヘソ被寄ケル。(第二中70ウ)

とする。ここでは頼朝への示現の通報は、高倉宮事件に関わって討死した日胤の、いわば遺志として、その実現を頼朝に強くはたらかせることになる。これに比し、四部本は、日胤を宮最後の場から離脱させ、八幡参籠を続行させることにより、この謀叛に失望し、頼朝に期待を寄せる姿勢を一層具体的な形に

おいて示そうとしたものと思われる。

八幡神の神意は「青侍夢」に全貌を現わし、さらに進んで

佐殿、其夜は洲崎明神に詣て、御拜殿にて御神楽一番有けり。三十計の女人に神着せたまひて歌占に

源・同・流・と・石・清・水・只・関・上・よ・雲・の・終・ま・で

佐殿、喜の感涙を流したまふ。次には十二三計なる女人に神着せたまひて心喜氣にて

六原はみもすそ河の流れぞや只関下せ浪の下まで人々大に喜て憑しがりけり。(巻五188右)

と、頼朝に直接神意を示し、はるか壇の浦での勝利までも予祝する。

あらためて顧るに、正負対極を示すものの、成親、頼朝には直接神託が降りたのに比し、高倉宮には神託に準ずる夢想もなく(日胤の得た示現は頼朝へのものであった)、その耳に達したのは頼政・伊良らの人智による判断でしかなかった。

四 頼朝と平家物語

頼朝は、高倉宮の全うしきれなかった期待を、宮には開示されることのなかった神意のもとに実現していく。成親から、高倉宮を介し、頼朝の登場にいたる物語の流れは、平家討滅の企図が高倉宮謀叛を境界として、負から正へと転化していく階梯としてとらえることができる。

しかし、頼朝にかかわる説話には一方で、その流れを阻害す

るかと思われるものがある。周知の、朝敵揃、延喜聖代、咸陽宮と続く話群で、それらは次に示すように、頼朝挙兵の報（大庭早馬）が関東より京にもたらされた場面に位置する。

青侍夢

大庭早馬

清盛、頼朝の亡恩行為を怒る

※朝敵揃

※延喜聖代（五位鸞説話）

※咸陽宮（燕丹説話）

頼朝謀叛の事情（文覚教唆が関わること）

文覚譚（発心由来、勧進帳、伊豆配流等）

文覚、頼朝に挙兵を勧める

文覚、福原に赴き、院宣を頼朝にもたらす

頼朝挙兵譚（山木攻撃から関東平定まで）

維盛ら追討軍として進発

頼朝の物語世界への登場に先立って、頼朝を代々の朝敵滅亡（朝敵揃、延喜聖代）、忘恩者滅亡（咸陽宮）の系譜に位置づけようとするこれらの説話の存在をどのように理解したらよいのか、読み手を悩ませてきた。たとえば門前真一氏は⁽²⁵⁾

作者は表面の直接の文脈では頼朝としながら背後の全体の構想ではそれを清盛とする二重の表現Xをとってゐる

とこれを切り抜けようとし、山下宏明氏は⁽²⁶⁾

これら先例説話の引用を、

されば、今の頼朝も、さこそはあらんずらめと、色代する人々も在りけるとかや。

と、前に畠山らの見通しを否定しきさやいた人々と同じように「色代」として逆転してしまふ。本来、軍記物語は、故事をはさみ込み、そのはさみ込まれた例証によって物語の主題を補強して行くものであるが、この場合は、その軍記物語としての常套の例証方法（制度）を逆手にとって、ひたすら頼朝の忘恩を責め自らの所行を省みない清盛の姿を突き放して語る。

と解釈する。山下氏の引く本文は寛一本であるが、四部本も延喜聖代・咸陽宮を「公卿の座より時忠卿進出て言けるは」と時忠の発言とし、長門本・源平盛衰記もまた、朝敵揃以下の説話を「入道の気色に入らんとて時の才人ども申けるは」（盛衰記）と追従の言葉とする。延慶本は発言者が明示されていないが、昔ノ恩ヲ忘レテ朝威ヲ軽ズル者忽ニ天ノ責ヲ蒙リヌ。サレバ頼朝旧恩ヲ忘レテ宿望ヲ達セム事神明ユルシ給ハジト旧例ヲ考テ敢テ驚ク事無リケリ。（第二中136才）

と平家側の判断（清盛自身か）であることにはかわりはない。従って、山下氏の解釈は平家物語諸本に共通して成り立つ。が、しかし、頼朝のすみやかな滅亡の暗示が平家側の希望的観測にすぎなかったとしても、頼朝の挙兵が朝威に背くものであり、平治の乱の折、助命されたことに對する忘恩の行為であることを、これら長大な説話は刻印しており、その事実はお容易に物語

から消え去りはしない。朝威に背くものとの批判は福原院宣押受により、忘恩者との謗は文覚の存在により回避される⁽²⁷⁾としてものである。

兵藤裕己氏⁽²⁸⁾は、こうした物語の表層での文脈の合理化にこだわりすぎともいえる解釈を退け、「平家が頼朝の追討に向かう宣旨も、また頼朝が入手した平家追討の院宣にしても、すでに双方における名分のレヘルにまで相対化されている」こと、及び「平家の没落が、王朝世界の終末として現象している以上、辺境で蜂起する源氏努力とは、それ自体、王朝の秩序理念、またそれに支えられる王権因果論を相対化する原理である」ことから

相対化された〈歴史〉の裂け目から、「末世」「澆季」の不安がその現実的な正体をのぞかせ始める。そこからめくれ上がるように世界が向こう側へ反転してゆくのは、巻七の平家都落以後、つまり畿外への平家の流離・没落をかたる以後の世界である。

と、この巻五を「〈歴史〉とモノ語り、日常と非日常という二元的境界が反転する」「転回点」ととらえている。この尖鋭な読みとりは、先に疑問とした、朝敵揃以下の説話の存在意義そのものに對する解答となっている点、これまでの論と一線を画す。しかし、物語に即する限り、第三節で述べたように「大内裏神祇官」での神々の議定を受け、その冥意を帶する文覚の説得により、頼朝の挙兵は実現したのであり、源氏勢力は単なる

辺境のモノではない。この世界の秩序の根源そのものは崩れてはいないのであり、巻五以降も無謀介に「向こう側」に放り出されるわけではないだろう⁽²⁹⁾。

物語は、都での頼朝評価をはなれ、以後、頼朝に即してその行動を辿る中ではもはや、事態の進展に背反する例証をもちこむことはない。そこでは先述の洲崎明神での歌占説話の他、延慶本・源平盛衰記においては次のような夢想譚も語られる。頼朝離伏時代の挿話として、腹心の足立盛長の見た夢を懷島景能が

最上吉夢也。征夷大將軍トシテ天下ヲ治メ給ヘシ。(中略)

近ハ三月遠ハ三年間ニ酔ノ御心サメテ此夢ノ告一トシテ相違フ事不可有⁽³⁰⁾ト申ケル。(第二中142ウ)

と夢解きしたというのである。その意味で、頼朝の物語世界への登場の初端に朝敵揃等が語られ、しかる後に(延慶本等のように離伏期の動向をも含め)実質的活動が叙述されるのは、それが「伊豆国の流人」頼朝にとって、ひとたびは受けなくてはならない、罪の言挙げ・先取りによる逆説的な禊ぎであったのだといえるかもしれない。

しかし、そのような禊ぎを必要とする登場人物によって事態が切り拓かれる物語とは一体何か。鹿谷事件、高倉宮謀叛を経て頼朝に至り、反平家運動は実を結んだ。物語はその流れを意味づけてきた。頼朝の勝利は神々の冥意に裏づけられたものであった。が、その神々の議定にて春日大明神が

其後我が子孫に賜るべし（巻五156右）

と口をはさみ、頼朝の後に藤氏將軍の出現することを予告する（³¹）のも、それが歴史事実であつただけではなく、物語が頼朝を主人公とし、平家から源氏への政權交替史を描こうとするのではないということに關わつていよう。壇浦での平家滅亡の後の卷十二を物語は

元暦二年乙巳七月、平氏残り無く亡びて、西国も鎮まり、東国も安穩なり。国は国司に順い、庄は領家のまゝなり。上下安堵して障り無きを喜びけり。（巻十二209左）

とはじている。ここでも平家の滅亡は何よりもまず天下の秩序回復として受止められており、源氏の世の到来を直接に標榜しているのではない。朝敵揃、延喜聖代・咸陽宮の説話群は頼朝登場の襖ぎであると同時に、平家滅亡物語の半面である源氏興隆物語を、あくまでも半面に押しとどめる働きをしている。

平家物語においても頼朝の存在はいうまでもなく大きい。しかし、たとえば「物語の主題である曾我兄弟の運命を決定する、物語の枠組みとして」存在する真字本『曾我物語』のそれとは、明らかに次元が異なる。真字本『曾我物語』の頼朝に、朝敵揃等の説話が付与されることはおよそ考えられないし、仮に付与されたとして平家物語のような多様な異本群の中で、それが物語にとどまりつづける図もまた想像しがたいだろう。延慶本をはじめ平家物語読み本諸本が、頼朝拳兵譚を詳述するにもかかわらず、なお「平家物語」である根拠の一端もこの朝敵揃以下

の説話の存在に由来する。（³³）

結

反平家の動きが頼朝の拳兵に収斂し、それがさらに平家滅亡の時の流れに塗り重ねられることにより、物語の叙事は成り立っている。

巻五で神々が平家を（最終的に）見放したのは、清盛が鼻祖桓武帝以来の聖地ともいふべき平安京を捨て、福原遷都を決行したことを直接の契機とする。強引な遷都による混乱、人々の嘆き、（四部本には欠くが）福原での様々な怪異出現といった異常事態の中、大内裏神祇官を舞台とする神々の議定を、源中納言雅頼の青侍が夢にみる。頼朝拳兵は、したがって、遷都という異常事態が類を呼んだとも、さらには清盛の悪行が自ら招き寄せたともいえる。そしてまた、その背後には末代・末世の時勢が控えていた。反平家の承譜もまた己が輪郭を浮び上がらせつつ、ふたたび序章の包容力の中につつまこまれていく。

注

(1) 佐伯真一氏「平家物語の因果観の構想―覚一本の評価をめぐって―」(同志社国文学12 昭52・3)、「平家物語の因果観」(日本文学32の4 昭58・4)

(2) 兵藤裕己氏「平家物語序章論―歴史の論理と物語の論理―」日本文学35の1 昭61・1

(3) 金田一春彦氏他編『平家物語総索引』(学習研究社 昭48)を使用しての調査による。

計	小計	末法・濁 乱の機	濁世	晩季	世(代)末	末代	卷
26 (27)	6			1	3	2	一
	11		1		1	9	二
	4				1	3	三
	1				1		四
	1					1	五
	4 3				(1)	3	六
6 (7)	0						七
	2				1	1	八
	0						九
	1					1	十
	4 3	1		1		2 1	十一
	0						十二
	0						灌
	0						

(内)はここに問題とする末法・末世の意からは離れるものをも含めた用例数である。

○よなきすとたゞもりたてよ末の代にきよくさかふること
もこそあれ(巻六)

○…と末代の物語に申されん事こそ(巻十一)

計	小計	宿世	宿業	宿縁	宿命	運命	運	卷
18	1	1						一
	6		1			2	3	二
	5					4	1	三
	2						2	四
	1					1		五
	3			1	1	1		六
33	11				1	5	5	七
	2						2	八
	1			1			1	九
	7		2				4	十
	9		1		1	2	5	十一
	2					2		十二
	1						1	灌

(4) 石母田正氏『平家物語』(岩波新書 昭32。9頁)。傍点は引用者。

(5) 石母田氏の「運命」観からは必然的に、運命との「対決を回避しなかった」英雄としての知盛像の押し出しがはかれる。が、「見るべき程の事は見つ」と自害した知盛と、西洋叙事詩における英雄、たとえば遮二無二闘いぬいて死に至ったロランとの相違にも、ひとつには平家物語のこうした運命の様相が関わっている。

(6) 山田昭全氏「盛者必衰」(別冊国文学15『平家物語必携』昭57・8)は、「盛者必衰」「生者必滅」に使いわけはなく、「へ盛者必衰」は「へ生者必滅」や「へ会者定離」「へ実者必虚」などともに「諸行無常」を形成する一要素」であ

ることを説いている。

- (7) 佐伯真一氏「平家物語構想論の可能性」(同志社国文学 17 昭 56・3)。傍点引用者。

- (8) 今成元昭氏「今昔物語集の兵説話をめぐって」『日本の説話2』(東京美術 昭 48) 所収。

- (9) 麻原美子氏「『平家物語』の構造——二つの謀叛事件をめぐって——」言語と文芸 93 昭 57・7

- (10) 早川厚一氏「四部合戦状本平家物語評釈(七)」(生形 貴重氏・佐伯真一氏との共同研究。昭 62・12) 212 頁。

なお、麻原氏が頼朝に対比される人物を高倉宮とみなすのに対し、早川氏は頼政とする。次節に述べるように叙述構造上、頼朝が高倉宮と並ぶ位置を基本的に占めていると考えるが、令旨による頼政拳兵と院宣を掲げての頼朝拳兵という構図からは、頼政に対比される側面も無視できない。

- (11) 引用は早川氏らの「四部本評釈」(現在巻四まで刊行)、及び汲古書院影印本による訓み下しの形で示す。

- (12) 生形貴重氏「四部合戦状本『平家物語』の一面」日本古典文学会々報 111 昭 61・12

- (13) 頼朝拳兵における頼朝の「多年の宿願」と文覚の教唆との関係は、砂川博氏「頼朝拳兵由来譚の表現構造——延慶本平家物語に即して——」(日本文学 33 の 6 昭 59・6) に詳しい。

また、高倉宮の帝位へののぞみは明言されていないが、

「位にも即かせたまふならば、末代の賢王とも謂ひつべし」という世評のあったこと、「太子にも立ちたまひ、帝位にも即かせたまふべきに」と口を切った頼政の勸説、及び伊長の「御位の相御位す。天下の事を思し食し放つべからず」との観相によって宮が決意したとあることから、少なくとも謀叛の時点での帝位への意欲は否定できない。

- (14) この結びの一文は他本にはないが、頼政勸説の大義名分が空疎なものとなることに变りない。なお、延慶本等多くの諸本は木下馬の話に続けて、同じく馬に関わりのある故重盛の話をひき、宗盛批判を前面に押し出す。

- (15) 山下宏明氏『軍記物語の方法』(有精堂昭 58 論文初出 昭 58・4) 104 頁。

- (16) 延慶本・長門本は伊豆に流された文覚が「草堂ヲ一字造テ毘沙門ノ像ヲ安置シテ、平家ヲ呪詛」したとする。文覚と平家の関わりは、強いていえば文覚在俗中、彼が恋慕した女房の母尼に、六波羅出仕を拒まれた者だと名乗り、接触していることがあげられようが、山下氏(注 15)も述べるように、これと呪詛とを結びつけることはできない。ここでの呪詛は、続いて文覚の頼朝への接近を語り出す、その状況作りとして持ち込まれているとみるべきであろう。
- (17) また延慶本は伊豆配流途上の龍神問答を詳述する等、文覚を「八大龍王の冥助を持つ僧」としても語る(生形貴重氏『「平家物語」の基層と構造——水の神と物語——』近代文

芸社昭59 初出昭57・4。132頁）。さらに、四部本には欠く熊野荒行譚において、文覚には不動明王の加護があったとする。文覚の問題については別稿を用意したいが、いずれにせよ文覚が何らかの神仏の意志のもとにあることは、諸本に等しく共通する。

- (18) 義仲挙兵は、巻六の清盛死去を前に堰を切ったように相次ぐ諸国蜂起の一環として語られる。しかし、四部本は巻五の福原遷都中の出来事として記す。この四部本のあり方については、別稿「三井寺炎上と福原遷都―延慶本・四部本の構成をめぐる―」（愛知教育大学研究報告38 二月刊行予定）に考えを述べた。

- (19) 延慶本はこの箇所を

有時此冠者云ケルハ、今ハイツヲ期ベシトモアラズ。身ノサカリナル時、京へ上テ公家ノ見参ニモ入テ先祖ノ敵ヲ討テ世ヲ取バヤト云ケレバ、兼雅打咲テ、其料ニコソ和殿ヲバ是程マデハ養育シ奉リシレト云テゾ咲ケル。

（第三本27ウ）

と描き、義仲の意志表明が自発的なものであり、周囲の教唆の結果ではなかったことを、より明瞭に示している。

- (20) 久寿二年、父義賢敗死の折、義仲は二歳（四部本は「三歳」）とあり、頼朝挙兵の治承四年には二十七（八）歳。

- (21) 覚一本はこの御所脱出の場面には説話引用がなく、東山々々の逃避行に

昔清見原の天皇のいまだ東宮の御時、賊徒におそはれさせ給ひて、吉野山へいらせ給ひけるにこそ、をとめのすがたをばからせ給ひけるなれ。いま此君の御ありさまも、それにはたがはせ給はず。

と天武帝の女装をいうが、日本武尊女装譚との習合であろう。

- (22) 高倉宮のめざすは平家討滅であるが、それは平家の奉戴する安徳帝を退けることともなる。従って、天武帝と大友王子（正確には大海人皇子と弘文帝）の故事を例証するのは、先帝の兄弟と先帝の皇子との争いという共通性を持ち、適切なものといえる。ただし、『吾妻鏡』治承四年四月廿七日条に載せる令旨にも「尋^二天武天皇旧儀^一、追^二討王位推取之輩^一、訪^二上宮太子古跡^一、打^二亡仏法破滅之類^一矣」という一節があり、高倉宮と天武帝の事績との類比自体は平家物語の独創ではない。

- (23) 四部本は義経の問いかけがなく、直接畠山の発言となっているので、最も整った形をとる覚一本を引用する。また、巻四「橋合戦」における侍大将忠清の献策に反発し、足利忠綱が利根川渡河の例をひきあいに出して、果敢な発言をする場面も事例に加える。ただし、ここでも四部本は忠清の献策なくして、忠綱が直接進み出ている。佐伯真一氏（四部本評釈（七）162頁）がいうように、四部本の個性の問題として別に考える必要があるだろう。

(24) 注10評釈193頁。

(25) 門前真一氏「平家物語卷五朝敵揃の文脈―主題的構成と年代記的叙述―」(天理大学学報28 昭34・3)21頁。

(26) 山下宏明氏注15論文109頁。

(27) 麻原美子氏(注9論文)は

頼朝が自から父祖の意を体して、平家打倒の宿願を果すべく人々に積極的に働きかけたというのではなく、人から執拗に勧説されて重い腰をやっとあげたとして、恩義に報いる叛逆罪の罪を他に転嫁している

ことに注目し、「文覚は頼朝のそうした罪を背負わされたいわば犠牲の羊である」とみなす。ただし、読み本系の頼朝は「且は亡父の素懷を果し、且は君の御憤りを息め奉らむ」(巻五182左)との意志を内に秘め、必ずしも受身一方ではない。加うるに延慶本の場合、文覚の頼朝煽動に先立ち「文学ガ行法ノ功力」を「報恩謝徳ノ為ナラバ悪業煩惱モキエハテム无始ノ罪障絶ヌベク(中略)祈精モ仏意ニ相応シ所願モ我身ニ成就スラムト貴カリケル形儀也」(第二末37オ)と紹介していることが意味をもつ。頼朝は文覚が、父義朝の頭をさし示すに及び、遂に心を開くのであるが、頼朝の挙兵を「(亡父義朝への)報恩謝徳」の行為とみなす(真字本『曾我物語』の「本朝報恩合戦謝徳聞静集」との内題が想起される)ことにより、忘恩の「悪行」も解消されるという理解が導かれよう。

また、問題の燕丹の話にたちもどって例証としての構造を再検討するならば、老母への孝養の念ゆえ烏頭角馬の奇蹟を呼びおこした帰郷譚と、始皇への積年の恨みから、帰京を許された恩を忘れての謀叛譚との二つの部分からなる。このうち忘恩者滅亡の例証となるのは後者であるが、「孝子靈驗談・恩愛者成功談」(今成元昭氏『平家物語流伝考』

風間書房 昭46。206頁)としての前者は、今成氏のいうように、平家物語の「愛への強い志向」ゆえ「構成上の無理は覚悟の上で」割り込ませられたものであって、例証としての意味を持っていない、のかどうか。注意したいのは、頼朝の挙兵は孝養・恩愛ゆえの謀叛(忘恩)であったことで、恩愛者成功譚が例証としての意味を持たないというのならば、忘恩者滅亡もまた頼朝の行為の例証たりえない。両者の矛盾は、文覚の行法の功力の介在により止揚(孝養ゆえの謀叛の成就)されることとなる。従って燕丹説話がとりこまれた当初の企図はあるいは、こうした形での唱導性がかかわっているかもしれない。しかし、ここでは燕丹のみならず、朝敵揃、延喜聖代をも含めた一連の話群が、物語の進展に異和感を与えつつも、なお諸本に等しく保持されている機構の深層を問題としたい。

(28) 兵藤裕己氏『語り物序説―「平家」語りの発生と表現―』(有精堂 昭60 第II章)他。ここでは「平家物語序章論―歴史の論理と物語の論理―」(日本文学35の1 昭61・

1) による。

(29) 生形貴重氏「延慶本『平家物語』と冥界・龍神の侵犯と

世界の回復・大將軍移行の構想——」(日本文学 36の4 昭

62・4)も兵藤氏の説を評して「カオス化した、全てが中

心性を喪失した状況からの秩序の回復過程として物語を分

析すべき」と述べる。ただし、兵藤氏の「(歴史)の自壊

作用」という読みとりは魅力的で、序・1でも述べたよう

に、物語がそうした大きな時の流れにのっていることは確

かである。後に頼朝が「吾国には未だ先例」なき守護・地

頭の設置を望み、実現する(巻十二)など、秩序の回復と

しても、それはもはや王朝の全き回復ではありえなかった。

(30) 源平闘静録は卷一之上(十二巻本の卷一相当)にこの盛

長夢物語を記す。闘静録は巻五を頼朝の下総への進軍から

筆を起こし、石橋山敗戦、安房落以前を欠くから、朝敵揃

等の説話がどのように処理されていたか不明であるが、物

語の開卷当初から、源平の動向を並行して描き、そこに盛

長夢物語も位置せしめるあり方と、朝敵揃等の説話とは本

質的に相容れないものであっただろう。早川厚一氏「『源

平闘静録』の巻立てと構成」(名古屋学院大学論集19の1

昭57・9)の投げかけた、闘静録を無前提に零本とする

ことへの疑義の蓋然性は高いと考える。

(31) 春日明神の発言は屋代本、八坂系諸本になく、平家物語
の成立年次をめぐる議論の中で注目を集めてきたのは周知

のことである。しかし、原平家はいざしらず、屋代本も巻
十二末尾に「承久三年ノ夏比 一院右京権大夫義時ヲ討ン
トシ給ニ、軍ニ負サセ給テ」と承久の乱に言及し、その叙
述は源家將軍の途絶を前提としているといえよう。

(32) 山下宏明氏「鎮魂の物語としての『曾我物語』」名古屋

大学文学部研究論集 文学30 昭59・3。傍点は引用者。

(33) ただし、早川厚一氏「源平闘静録考」巻立てから見た巻

八下の読みについて——」(中世文学31 昭和61・5)が

同じ「源平系」と言われる「延慶本」などが、源氏視点

からの描写は見られるものの、結局は平家の物語である

のに対して、闘静録は、源氏の視点から描かれたまさに

源平の物語であると言えよう。

と問題提起するように、闘静録は別に考える必要がある。

また、頼朝称賛の観点から、先行する記事自体の改編をは

かり、頼朝の天下統一の過程を描くという新たな主題を前

面に押し出す大島本巻十二も、すでに「平家物語」の枠を

超えている(拙稿「『平家物語』終結部の諸相——六代の死

を中心に——」軍記と語り物19 昭58・3)。

付記 小稿は昭和六十三年度軍記物談話会例会(八月二十八日

於同志社大学)での発表に基づく。